

1. 島おこしの提案 — 島民と島の新しい接点 —

島おこし

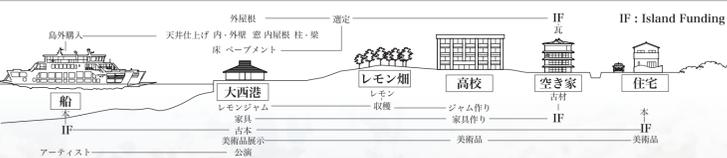
島資源を軸とした島民による待合所

大崎上島は瀬戸内海の恵まれた風土に適応するよう風待ちや農業などの多様な文化が形成されてきたが、現在は人口減少により空き家の増加、コミュニティのスポンジ化が進みかつての島の文化が継承され得ないことが危惧される。しかし、時が流れ島民構成が変化すれど島に受け継がれてきた文化は、建築物や土地に残る島資源の形で根付いている。私たちは現在利用されていない島資源を活用し、島民が自発的に交流できる場を設け、島民の新たな接点と生み出す「島おこし」を行う。



2. 建築をかたちづくる島資源の循環

大崎上島は時代の流れの中で、温暖少雨の気候からレモン畑が、また島民の記憶と経験から書物や建築物が島資源として貯蔵され受け継がれてきた。私たちが提案する島おこしではこれら島資源の循環を目的としたアイランドファンディング (IF) の形で集めることに加え、島外の技術と融合利用する。



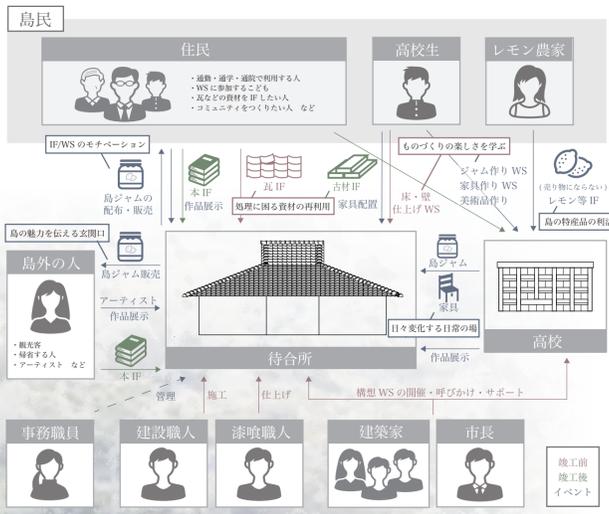
3. 工期 — 島を巻き込む設計・施工・運営プロセス —

アイランドファンディング (IF) で集めた島資源をワークショップ (WS) を通じて設計・施工し、持続的な運営体系を構築していく。建物竣工後だけではなく、起案・施工段階から共に試行、検証することで待合所と関わりを生み、「島おこし」実現に向けて現場の意見のフィードバックによる調整を行える体制を整える。また、竣工時点で全て完成させるのではなく、運用開始後に現場や運営の様子を都度確認し、改善することのできる継続的で柔軟なプロセスの設計をする。時間と共に場所を育て、島民自らが島の資源を共有できる待合所を提案する。



4. 関係図 — IF・WSを通じた人々の関わり —

アイランドファンディングにより島資源が集まり、それら島資源を利用して島の拠り所として待合所が立ち上がる。待合所施工時にはワークショップ (WS) を実施し瓦の選択、漆喰の作成、土間の施工などを島民とともに行うことで、島民と島が繋がる場として待合所がふるまう。また、島外の人々もアイランドファンディングを行うことができ、観光のみでは得られないような島との関わりを作ることができる。



5. アイソメ図 — コスト・環境・管理への配慮 —

アイランドファンディングで集めた島素材を用い島民を巻き込んだワークショップを行うことで、島おこしが活性化される。それを受け、島としての持続可能性の上昇に資する待合所の施工・運営を行う必要がある。そこで「コスト」「環境」「管理」に着目し、建築の各構成要素を決定する。

サルベージ材を用いた大屋根

空き家の瓦を再利用して大屋根を作る。複数の空き家の瓦を活用することで、屋根面にコントラストが生まれる。ガラスの瓦も用いることで、室内に光を取り入れ、夜は屋外の街頭の役割を担う。

コスト 環境

スチールハウス工法

低コストなスチールハウス工法を用いる。尺モジュールを用いた従来の木造と同じスケールの建物の設計を、より細い柱で実現できる。柱材はスチールであるため高強度でかつ軽量である上に、専門的な継手技術が必要としないことから施工が簡便である。

コスト

閉じた空間

開けた待合室を囲うように事務室や売店、トイレ等閉じた空間を配置することで施錠や空調の管理を簡便に行える。室内方向に波板部材を用いた片流れ屋根を設けることで、圧迫感をなくし、開けた空間と閉じた空間が連続する。

コスト 環境 管理

開けた空間

外に開けた待合室空間とすることで海風を取り入れ、解放的な居心地のよい空間とした。梁から吊り下げられるレールにより、展示、空間の分割をすることができる。また、梁の断面は上部に開いた溝形であり、そこに設置された照明の光が屋根で反射して室内に伝わるため、柔らかな光が待合室を包む。

環境

外構のファサード

建物を囲うように集まったサルベージ材を並べる。これらの資材が次第に建物のファサードとなっていく。集まった資材は家具や壁材など、この建物をかたちづくる要素となる。

コスト 環境



夜間はまちを照らす



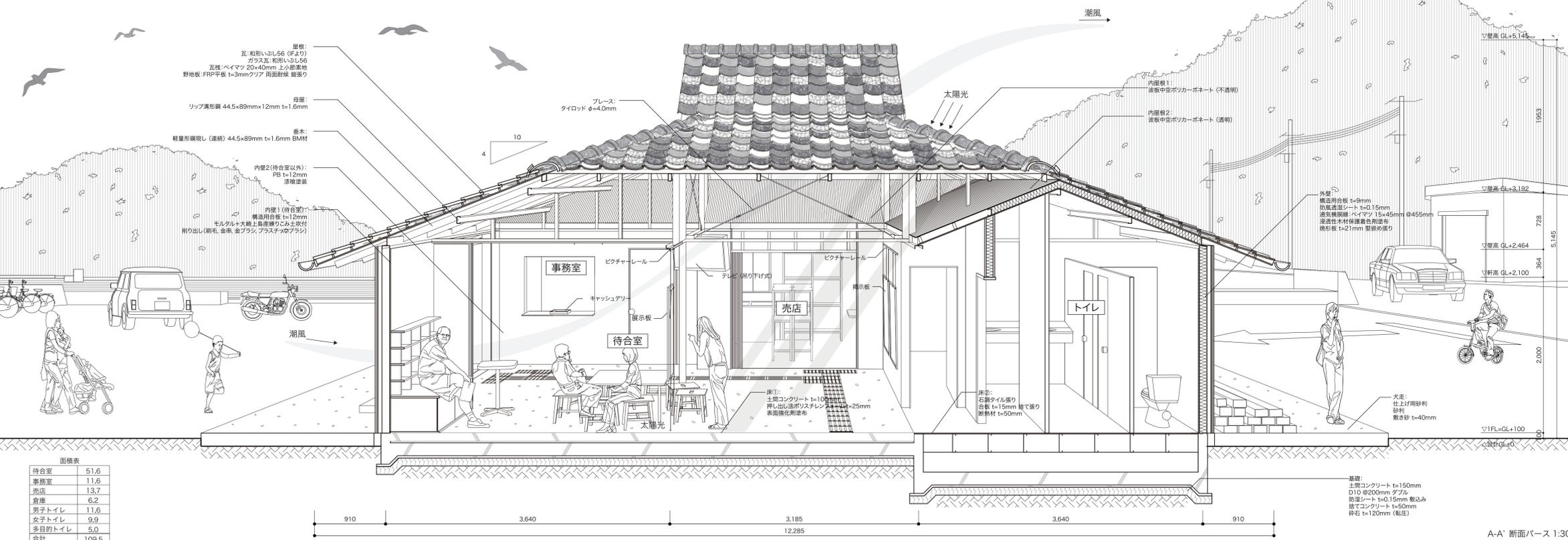
島民が集い土壁をつくる



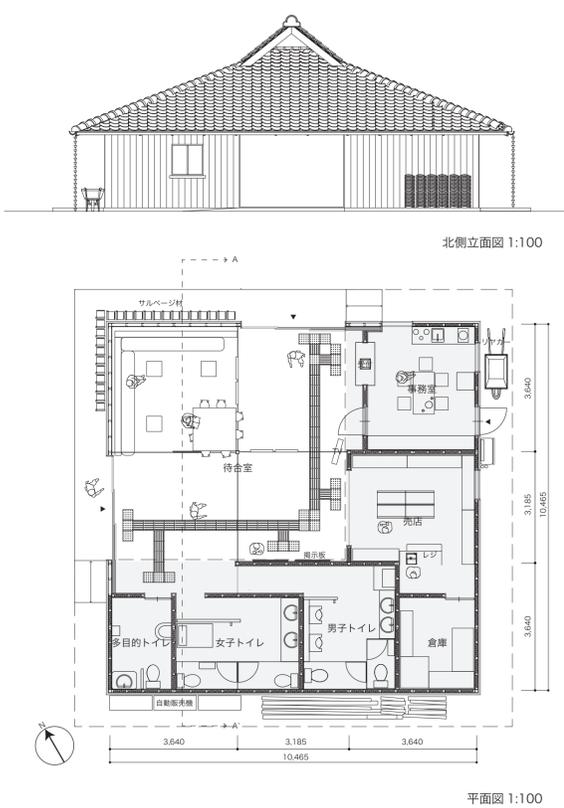
島民とともに設計する



ひとつ屋根の下に集う



待合室	51.6
事務室	11.6
売店	13.7
倉庫	6.2
男子トイレ	11.6
女子トイレ	9.9
多目的トイレ	5.0
合計	109.5



A-A' 断面パース 1:30

平面図 1:100